

踏み跡 < My mountains >

富士山	富士山	No.109
-----	-----	--------

昭和43年6月8日

会社の同僚で、大学時代山岳部にいたという草野さんと意気投合して6月の富士へということになった。同じく同僚の近藤さんも誘ったが、彼は冬山の経験が全くないので二人でピッケルとアイゼンを調達してあげた。新宿発20時27分甲府行。通勤電車でけっこう混雑している。大月で富士急行に乗り換え、河口湖着は23時30分。二月に来た時に時間つぶしに入った駅前の売店を仮眠の宿にしようと思っていたが、スケートシーズンが終わったら休業のようで、ガッチリとが閉まっている。駅で問うと駅員が駅前の旅館に電話してくれ、宿の確保ができた。「時間も遅いことだし素泊まりだから……」(交渉係の私のセリフ) という理由を武器に宿の女将さんとしばし交渉の結果、三人で1300円ということにして貰った。借りた目覚まし時計を4時にセットしすぐに布団にもぐりこむ。電車の中で飲んだビールはもうとっくに体から抜けてしまったが、土曜日なので一週間の仕事の疲れも手伝ってすぐに眠りに。

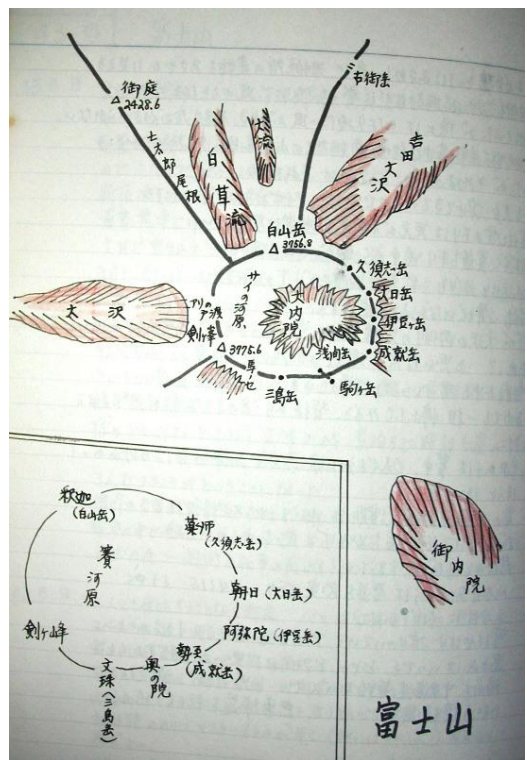
昭和43年6月9日

三人とも寝坊することなく目覚まし時計の音で起床。バスは駅前を4時半に出発。スバルラインを走り5時30分に五合目に到着。雲の上に浮かぶようにハケ岳と奥秩父。6時15分行動開始。吉田大沢に入り、六合目7時30分。近藤さんのために約一時間の雪上訓練。初体験のわりにマスターするのが早く、年齢の割りに感がいいのは野球をやっているせいだろうか。8時15分訓練を終えて本番開始。所々もう柔らかくなりかけた大沢の真ん中をゆっくり登り、12時15分吉田口頂上に到着。(下写真)



空は紺碧と言うにふさわしい色で、測候所の建物が鮮やかに見える。吉田側でほとんど風を受けずに登ってきたので風のことなどすっかり忘れていたが、頂上はかなり冷たい風が吹き、あまり長くは居られない。願わくば剣ヶ峰まで行き南アルプスの眺めをと思っていたが、断念して12時45分下山開始。雪も大分融けてきているので、下りはアイゼンを外す。腐った雪の中の不安定で非常に歩きにくいので足元に気をつけながら慎重に。しばらくは夏道を下り、途中から再び吉田大沢へ。

のんびりとグリセードを楽しみながら下っていると……、どうも滑っていないような感じがする。だが大沢の兩岸の岩石を見ていると後ろに去っていくので下っているのは間違いなさそうだ。



踏み跡 < My mountains >

あれっ? 下っているのに足元の雪が後ろに去っていかない。と不思議に思いながら滑っているうちに、自分達が小さな雪崩の中を雪と一緒に滑っていることに気がついた。

あわてて一旦停止してみると、背後から泡のような雪が押し寄せてきた。

それからは無我夢中、泳ぐように雪の流れを横切り、大急ぎで右岸の岩場に駆け上がって、ほっと一息。

岩の上から見下ろすと、雪崩がゆっくりしたスピードではあるが段々にその幅を広げながら走っていくのが見えた。危ないところだった。

八合目あたりからは夏道を忠実に下り、14時15分五合目に帰着。15時のバスで河口湖駅へ。

河口湖駅着16時、帰りは高速バスでと思っていたが満員で切符が買えず電車で。そして車内で無事生還を祝して、缶ビールを飲みながら一日を振り返る。

雪はやはり凍り付いていてアイゼンで登り下りするのが一番だ。それにしても、富士山はいつもヒヤッとするような思い出を残してくれる、正しく「神の山」だ。

以上